

---

CAR LOVE LETTER 「Welcome back」

YAS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「Welcome back」

### 【Nコード】

N O 7 2 7 I

### 【作者名】

Y A S

### 【あらすじ】

仕事を終えて駐車場に向かう二人。車好きの後輩が、車を手放すと言い出した。（テーマ車種：トヨタスプリンタートレノ（AE86））

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持ったことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: TOYOTA Sprinter Trueno)  
AE86)>

車好きの後輩がさ、車を手放すって言うんだ。

正直驚いたよ。毎晩の様に峠に走りに行ってたヤツでさ、そのせいで毎日寝坊で、会社に来るのもコアタイムギリギリなアイツがさ。

とは言え俺もアイツの気持ちは分かるんだ。

俺も学生の頃は走り好きで、毎晩の様に峠に通ってた。

次の日の授業なんか関係ない、今この瞬間を生きる。そんな毎日だった。

社会人になってからは、流石の俺も気持ちを入れ替えたが、アイツは俺が学生の頃に感じていた、若さの輝きやエネルギーの様な物を、社会人になってからも放ち続ける、そんなうらやましいバカだと思えたんだ。

そんな後輩がさ、車を手放すって言うんだ。

見るものが見ればため息の出る様な、あの八チロクをだ。

「デキちゃったんですよ。」

何とも分かりやすく端的な理由だ。予想していた答えをそのままもらったと言ったところだ。

だがアイツは、彼女とは結婚したいと思っていたし、そんな彼女との間に授かった子です、迷いは無いですよ、なんて言う。

こう言う事もさりとて言える、素直で真っ直ぐなところもコイツの

魅力なんだろう。

しかし、大好きな車趣味が続けられなくなるのは苦しいですね、と後輩は肩を落とす。

しばらくは燃費のいい小型車で頑張りますよ、とも漏らした。

何かを手に入れようとすれば、何かを犠牲にしなければならない。俺もそんな苦渋の選択を迫られる事が何度もあった。

それを乗り越える度に大人になって行く様な気はしたのだが、その度に大切なモノがひとつずつ失われて行く様な気もして、何とも苦しく切ないのが常だった。

そんな会話をしながら俺たちは会社の駐車場まで歩く。

俺たちはちよつと仕事でトラブルを抱えてしまって、今日もこんな時間まで残業だ。しかもサービスで。

この残業代がちよつとでも付いてくれれば、八チロクを売らなくていいかも知れないんですがね、とヤツは嘲笑する。

俺もそうだ。結婚して家計に負けて、車もフィットになっちまったが、残業代がフルで支給されたら、またスポーツカーに帰り咲き出来るだろうにと、幸せな妄想をする。

駐車場には俺たちの車しか居なかった。そんな時間って事だ。

相変わらずピカピカな八チロクだ。ネオヒストリックに片足突っ込んだ世代の車にして、このコンディションだ。

全塗装してますけどね、とカラクリをばらす。

エンジンも自分でオーバーホールしたと言っ位の気合いの入れようだ。その気合いに見合い、すこぶる調子がいいそうだ。

「一体いくらで売るつもりなんだい？」と無粋な質問をしてみると「大分乗ったし、いろいろやってますからね、30万も貰えればありがたいかな。」と、あの溺愛っぷりにしてはすいぶん控え目の本人評価額ではある。

「せっかくですから、味見どうです？」

アイツは俺に八チロクのキーを差し出してきた。誰にも運転させなかった、八チロクをだ。

俺がまだ独身だった頃、アイツが新人で入って来てさ。その頃俺もランエボなんか乗ってたから、何度か一緒に峠やサーキットに行ったりもした。

そんな経緯から仕事の上でもプライベートでもアイツとは仲良くしてるし、あの頃の俺の走りも評価して、今こうして八チロクのキーを差し出してくれているのかも知れない。いずれにしても、アイツが他人に八チロクを委ねるのは一種の驚きではある。

懐かしいな。

俺が初めて手に入れた車も、実は八チロクなのだ。大学の先輩からのお下がりで、ずいぶん遊びたおされてボロボロの状態だったが、それでもホントによく走った。

ナルデイのステアリングにTRDのシフトノブ。俺のオンボロも同じだったな。

ヘッドランプのスイッチやワイパのスイッチは、そうそう、ココにあるんだ。思い出すなあ。

キーを捻ると、少し古めかしい振動とともに、短いクランキングで4AGが目覚ます。

パワーが有るわけでもなく、超高回転まで回るわけでもないが、気持ちよく吹けるこのエンジンには、「この時代」の雰囲気宿っている。

俺には久しぶりのスポーツカーで、しかもそれがアイツの八チロクだ。不安と悦びがごっちゃになった気分、俺はシフトノブを1速に押し込む。

久しぶりのマニュアルにしては上手くスタートを決め、俺たちは駐車場から誰も走っていない国道へと滑りだす。

絶対的な加速感も無いし、最近の車の様な快適さも無い。だが八チロクには、軽快感と一体感と言った、今の車では味わえない「良さ」がある。

国道から少しの所の、ちょっとした農道で、俺は八チロクにムチを入れる。

猛々しい吸気音と共に、八チロクの全身全霊の加速が始まる。

「いい音でしょ！」自慢気にアイツは言う。

確かに！俺はアイツの目をチラリと見て、ニヤリと返す。

俺もいろんな車に乗った。

スターレット、シルビア、ランエボ……。そんなスポーツカーだけじゃなく、RVを転がしてた事もある。

しかしこの八チロクの落ち着く感じ。  
八チロクは、俺にとって原点というか、久しぶりに帰った地元で、悪友が地元の訛りでニヤニヤ笑いながら、まあ一杯やれよと言っている様な、そんな何年経っても変わらない交流の様な感覚があった。いろいろとずいぶん遠回りをしたけれど、俺の帰る場所はここだったのかも知れない。  
俺は、気付いてしまったんだ。

駐車場に戻り、俺はヤツにこう言った。

「こいつさ、俺が預かっておくよ。お前には、30万貸しておくわ。落ち着いたら、こいつを迎えに来なよ。」

狙い通りと言った笑みを浮かべ、ヤツは俺にこう言ってきた。

「うちの子をよろしくお願いします！先輩のフィットを付けてくれたら、25万でいいですよ！」

やっぱり狙い通りか！さあて、嫁さんにはなんて説明しようかな。

「なあ、23じゃダメ？」

「せっかくですから、味見させてもらえますか？」

俺たちは目を合わせ、誰も居ない真夜中の駐車場で大爆笑した。

俺は八チロクを振り返り、ただいま、という視線を送る。

その視線に八チロクは、お帰り、と言っているような、ちょっとだ

けそんな気がしたんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0727i/>

---

CAR LOVE LETTER 「Welcome back」

2010年10月13日08時30分発行